



戦争から平和を学ぶ

戦争を伝えていく

私たちは十月に静修修学旅行へ行ききました。そして平和についてたくさん学びました。そこで今回は、戦争関連の新聞記事を読んだ感想と、私たちが平和学習で学んだことを皆さんにお伝えしたいと思います。

今回私が読んだ記事は、戦争を伝えていく立場の人についてです。

その記事には、戦争を伝えていく上で自分にできることを考え、行動に移そうとしている方のお話載っています。

この記事の中で、その方が、「一人一人の人生を後世に伝えたい」と言っているのには驚きました。

私たちは今までに被爆者一人一人の人生を考えたことがあったでしょうか。あまりないでしょう？

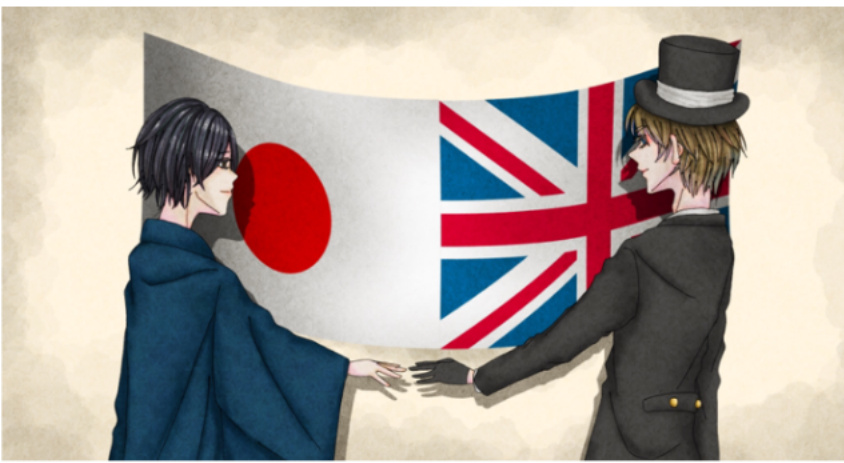
よく聞くのは原爆投下直後のことですが、実際にはそれ以前の生活も詳しく知る必要があると私は考えています。

その人たちの壮絶な生き様をきちんと知ることが私たちに求められていることです。

人気漫画『ペリリュー』(太平洋戦争を題材)を読もう!

太平洋戦争末期の、パラオ諸島ペリリュー島の戦いを描いた漫画「ペリリュー」をご存知ですか。これは武田一義さん作で、日本漫画家協会賞優秀賞を受けた評価の高い人気漫画です。作者は四十六歳で戦争の体験は無く、調査、取材の元に戦場の現実を漫画にしています。作者は、ペリリュー島の戦いを調べ、考え、作品中の色々な兵隊達と共に驚き、怒り、悲しみながら物語を進めています。本を読めば、作者の体験を読者も追体験するはずだと言っています。作品を読むことで、戦争の体験を継承する場となるでしょう。

戦争について知ること、それは簡単なことではありません。語ってくださる方々もそれを聞く私たちも辛くなることもあると思います。でも、その現実から目を背けていると、後世に戦争というものを伝えられなくなりそうです。今は平和な広島。現地へ行ったからこそ感じたことがたくさんあります。多くの方が亡くなったこと、そして、家族を失った方が数多く存在していること。怖いこともたくさんあるけれど、それらを知らなければ、記憶伝えていくことはできません。記憶は伝えることをやめたら消えます。そして、私たちは被爆者の方々のお話を直接聞ける最後の世代です。だからこそ、学校で設けられている戦争について学ぶ機会を大切に、自分でも情報を集め、知識を増やすことが大切です。



『黒い雨』訴訟

原告勝訴



『黒い雨』とは、広島に落とされた原子爆弾の爆発後立ち上ったキノコ雲から降った、放射性物質が含まれた雨のことです。この雨によって、爆心地から遠く離れた地域の人々の中にも、放射性物質による障害が現れました。今回の訴訟では、『黒い雨』の被害に遭った方々が救済を求めて裁判を行いました。原告(訴えた側)が勝訴し、広島市の原告五三人への被害者健康手帳交付を開始しました。被害者援護の拡大活動を続けた人々は「本当に嬉しい」と声を弾ませました。

編集後記



私たちは戦争や平和について学び、新聞を読んでこの記事にまとめました。短期間でしたが、新聞から多くの情報を得て、平和についての知識がより深まりました。平和について学ぶことは簡単ではなく、自ら学ぼうとはなかなか思いませんが、この記事をきっかけに、歴史について興味を持っていただければ嬉しいです。

白い鳩新聞



A2

これは終戦後の東京・上野駅地下道で、生きのびるため残飯を拾い、お弁当を盗むほかなかった鈴木賀子さん(83)の体験だ。

終戦後、間もない1945年秋。当時「歳だった鈴木さんは空襲で家を焼かれ親を亡くし上野駅の地下道にいた。彼女は「浮浪児」と呼ばれた戦争孤児の一人だった。隣には歳の弟がいた。彼女には当時「13歳の姉が都内にいたが、事情があり一緒に暮らせなかった。

強烈なのは飢えの記憶で、生きのびるため、孤児仲間に盗みを教わった。それは数人で上野公園などを訪れる人々のお弁当を狙うというものだ。仲間には「すぐに食べ物を入れてくれれば、捕まっても取り返されることはない。」と教わった。だが、口に食べ物を入れると逃げ足が遅くなり何度も捕まり、殴られた。

過酷な地下道生活を抜け出せたのは、姉が必死で探した孤児施設に弟が入所できたからだ。ただ鈴木さんは定員オーバーで同じ施設に入ることはできなかった。その後、親戚宅を経て、血のつながりのない家に引き取られ就職し上京するまで、その家で育った。

私は終戦後の世の中は私が想像していたよりもはるかに悲惨で過酷な状態だった事を、この記事を通して知ることができた。

『当時は、人の生き死によりもなによりも、おなががすいていることが、空腹がつかつたの』。私はこの言葉に大変衝撃を受けた。今だったらこのような事があるだろうか。完全に心が壊されいるに違いない。それが戦争というものなのだと学んだ。

これからは、日常を当たり前と思わず、日々感謝して過ごしていきたい。

今は食べ物十分にあり、人の物を仕方なく盗まなくても生きていられる。けれど、戦争当時の子供たちは食べ物もろくになく、人の物を盗まないと生活ができなかったり、たくさんさんの暴力を受けていた。という事実を忘れることなく語り継いでいくべきだと思う。今私たちが普通に生活できていることは当たり前だと思いかもしれないが、戦争中の人々にとっては普通のことではないということを忘れてはいけない。

私たちが特に皆さんに伝えたいことは「戦争がないことだけが本当の平和なのか」ということです。話を聞いたりテレビで見ているだけで戦争についてたくさん知ることができると。なので、ただ考えるだけではなく実際に自分の目で見て、体験して考えてほしい。

私たちは修学旅行や事前学習を通して戦争や平和についてたくさん学んだ。まず最初に思ったことは「二度と戦争をしてはいけない」ということ。資料館で展示を見ているとグチャグチャになったり、焦げてしまっている当時の人が使っていたものがあつた。持ち主の人の血がついているものもあつた。写真や絵も残酷なものが多く、心が苦しくなつた。改めて現実だと思えないほどのおそろしい出来事が過去に起きたということを実感した。でも、当時のことを私たちはしっかりと知っておく必要があると思ひ、一人一人が戦争と向き合つた。戦争は経験していない私たちが思っているよりも残酷な出来事だったということを知り、思い知らされた。当時の人々がどれだけ苦しんでいるのか、原爆にはどれ程の威力があつたのか、私たちに必要、使命がこれから生きる高齡化して、人口も減っている。だから、苦しく辛い過去を思い出して一言一言に私たちがたくす思いを込めて戦争について語ってくれる人の話に耳を傾けることも大切だ。



編集後記

私たちは今回新聞を作るために、たくさんさんの新聞記事を読みました。そのほとんど記事の中に共通する思いがありました。それは、「伝えていく」「思いを継承していく」「引き継いでいきたい」です。戦争を繰り返さないためには誰かが次の世代に語り、教えていかねばいけません。次の世代こそ私たちです。みなさんは知っていますか? 「安らかに眠って下さい。過ちは繰り返しませんから」という言葉を。これは広島市の平和記念公園にある原爆死者慰霊碑の裏に刻まれている言葉です。私たちは平和な世界を築くために、これからも平和について学んでいかなければいけないと思ひました。

戦争新聞

B1

ちょうど七六年前は人々は皆食べ物もお金もなく生きるのに必死であった。例えば捨てられた食べものを食べたり、物を盗んだり…。今ではあり得ないぐらい日本は荒れ果てていて、人々はつらい毎日を送っていた。特に、戦争でおったヤケドや傷の跡、原子ばく弾の被害で今でも苦しんでいる人々がいる。また体の病だけでなく心に傷を抱えている人々もいる。あらゆる人々が戦争にくしみや不安を持って生きていくのである。戦争を経験したという人は年々減少していき戦争というあの悲劇をテレビや新聞で以前ほど多く取り上げていないように思われる。戦争の出来事を過去の出来事、他人事と捉えず、後世に伝承していくことが、戦争経験者のが最も望んでいることであると思う。



↑兄と死んだ弟。



↑鉄砲を打つ練習。



原爆資料館の展示はどれも戦争当時の恐ろしさを伝えていて、写真よりも絵画のほうが恐ろしさが増した。なぜこのようなことが起こってしまったのか、なぜ原子爆弾の開発や実験を重ねていく上で、やめなかったのか。戦争は失うものの方が圧倒的に多い。このように何か国同士でぶつかりがあったとき、それ以外に家族や友達と喧嘩してしまったときにも、よくお互いのことを考え話し合うということが平和の第一歩だと思う。そして、戦争という恐ろしいことをおこなっていたのも、私たち人間だ。そのことを忘れず、戦争のことを知って、後の世代に語り継いでいくのが人間の責任だと思ふ。



私たちがこのような体験・経験をして感じたことやわかったことをこれから戦争について語り継ぐみなさんにお伝えしたいと思います。



- 1.戦争に対して自ら興味をもって調べたりして、もっと戦争の知識を増やしてほしい
- 2.今回のような授業や通常授業を通して知ったことを色々な人に伝えてほしい
- 3.日本が受けた被害だけを語り継ぐのではなく、外国が日本によって受けた被害も語り継いでほしい
- 4.戦争はロボットではなく人間が行っており、それぞれに大事な命があり家庭があることを忘れないで
- 5.戦時中は今の私たちのように好きなものを食べたり、好きなことをしたり、全く裕福とは言えない生活を送っていて我慢する事がたくさんあったこと
- 6.戦争は何か原因があって起きているので、片方の国が悪いのではないということ

今回の話を少しでも頭に入れて戦争に対して自分の考えを持って行ってください！！



編集後記

今回、戦争について学んでみてどうでしたか。戦争は絶対にしてはいけないということ、戦争が起こるとこんなことが起きってしまうのだとみなさんに思っていただけなら嬉しいです。最後まで見てくださり、ありがとうございました！最後にクイズがあるので、よかったらチャレンジしてみてください！



この中で戦争によってできたものはなに？

- 1.缶詰 2.鉛筆 3.あめ
さあ、どれでしょう？

答え

原爆新聞

B2

戦争は人々の命だけでなく、日常も奪い、多くの悲しみを生み出しました。今から紹介する新聞記事は当時七歳だった女性の証言について書かれています。空襲で家を焼かれ、親を亡くした鈴木賀子さんは戦争孤児の一人でした。孤児仲間に残るための盗みを教わりました。盗みをして逃げる途中に捕まり何度も殴られたそうです。しかし鈴木さんはお腹を空かせた弟のためにも必死に耐えました。鈴木さんは東京大空襲の時、母と長姉を亡くしました。

逃げるときに母から言われた、「お母さんもすぐに行くよ。」という言葉が母から聞いた最後の言葉となり、その後遺品や遺骨も見つからないまま母と長姉は帰らぬ人となりました。その頃、戦争孤児と呼ばれる戦争で家族を失った子供たちはたくさんいました。その中には栄養失調で死んでしまうなど、戦争の後に亡くなった方々も多かったそうです。「通行人が寝ている子供を蹴飛ばして歩いていました。あのころ、私のような戦争で両親を亡くした子供なんて野良犬と一緒にです。でも蹴られても動かない子もいた。栄養失調で死んでいるんです。」

当時は上野駅の餓死者は多い日で一日六人、平均二・五人だったそうです。強烈に残るのは飢えの記憶だそうです。「当時は人の生き死によりもなによりも、おながが空いていることが、空腹がつかかったの」、鈴木さんは絞り出すように語りました。次姉が必死で探した孤児施設に弟は入れましたが、鈴木さんは定員オーバーで入ることができませんでした。弟は二十歳で自ら命を絶ち、その後一緒に暮らすことはなかったそうです。

私たちにあって「体育館」というのは、運動をする場所、みんなと元氣よく遊べる場所。ですが、戦時中の体育館は、被爆者の救護場とされ、原爆の被害を受けた多くの人が床にぎっしりと並べられる、今では考えられないような光景がそこには広がっていたのです。並べられた被爆者のうち、大半は既に亡くなっているか、意識を失っているか。

医師と看護師が一人ずついました。手の施しようがなく、横たわる被爆者の様子を見て回ることもできませんでした。

戦況が悪化するにつれ、悲しみに暮れる余裕もなく、必死に過ごす日々だったそうです。

今の私たちは、毎日を当たり前のように過ごして、当たり前前に笑ったり泣いたり怒ったりできていますが、当時の状況、生活の様子と今の自分を比較してみると、普段の生活は決して当たり前ではないということ、当たり前前にはいつ壊れてもおかしくないということが分かってくると思います。私たち六十一回生は修学旅行で広島を訪れ、そう気付くことができました。もう一度、生きている事のありがたさを感じ、家族や友達、先生方、近所の方など、他者との関わりの時間を大切に過ごしてほしいと思います。



原立広島第二中学校
1946年当時
所長 滋くん(当時13歳)



当時3歳
11ヶ月

原爆の遺品紹介

伸(しん) ちゃん
ちゃんの三輪車

東白鳥町の自宅前で、三輪車に乗って遊んでいる時に被爆しました。全身に火傷を負い、「水、水……」と叫びながらその夜死亡しました。

その後の三輪車

伸ちゃんの三輪車は昭和六五年に広島平和記念資料館に寄贈されました。四十年間、庭防空こうに埋められていたため、さびたりくちたりしてポロポロになっていました。

お父さんとお母さんは、土に埋もれた三輪車のごろをへたで落とし、寄贈しました。伸ちゃんの三輪車のお話は、絵本やビデオにもなっています。

広島県の中学校に通う折免 滋おりめんしげるくんは、中山新町の建物疎開作業現場で被爆しました。

母親のシゲコさんは、破壊された町を必死で捜索しましたがなかなか発見できず、知人からの情報ようやく八月九日早朝、滋くんの遺体と、遺体に抱えられた真っ黒に焼けたお弁当と水筒を発見しました。

滋くんは出征中の兄と父に代わって、シゲコさんのたきんや煙を開こうとして煙を作っていました。その日のお弁当の中身はその煙から初めて収穫した作物で作ったおかずで、喜んで持っていたいました。シゲコさんは、それを食べる事なく死んでしまった滋くんが不憫でなりません。

編集後記

この新聞を読んで皆さんは何を感じましたか。私達は修学旅行で平和学習をしました。その後の学習で、戦争の悲惨さ、当時の状況などをたくさん学びました。あまりの悲惨さにショックを受けたら、目を背けたくなることもありましたが、ですが、そのような経験を通して多くの学びを得、二度とあのような過ちを繰り返さないよう、戦争の事実を私たちの世代が伝え続けなければいけないと強く思いました。平和を実現させるのは大変難しいことですが、戦争を正しく知ることに、自分自身でできる事は何かを考える事こそが、平和への大きな一歩になると、私達は信じています。一人一人が戦争と真剣に向き合いながら、平和の実現へと積極的に行動してほしい、それが私達が伝えたい、一番のメッセージです。